



2023年9月29日 第58号

JSSH NEWS

日手会ニュース

発行：一般社団法人日本手外科学会
広報渉外委員会

第66回日本手外科学会 学術集会を終えて

目次

- 第66回日本手外科学会学術集会を終えて
- 新名誉会員のご挨拶
- 新特別会員のご挨拶
- APFSSH 2023 学会参加記
- 手外科バトンリレー (第11回)
- 第15回 手外科医のリスクマネジメント
- Joyの声 (第8回)
- リレーエッセイ：技術紹介
- 物故会員への追悼文
- 日本手外科学会関連のお知らせ
- 関連学会・研修会のお知らせ
- 編集後記

佐 藤 和 毅

慶應義塾大学医学部スポーツ医学総合センター

第66回日本手外科学会学術集会を本年4月20日(木)、21日(金)に京王プラザホテル(新宿)で開催させて頂きました。

新型コロナウイルス感染症が5月8日に季節性インフルエンザと同等の「5類感染症」に移行される見通しであったことを踏まえ、現地開催を軸にオンデマンドとのハイブリッド開催とし、2,229名の参加登録、そして1,650名の先生方に現地参加して頂きました。非常に多くの先生方にご参加頂き、学術集会を盛り上げて頂きましたことを心より感謝申し上げます。

学術集会のテーマは『原点と挑戦』と致しました。手外科医の責務、手外科の『原点』を再認識しながらも、かつて臨床および研究で世界を牽引してきた日本の手外科が再び「ときめき」を取り戻し、さらなる高みを目指すためには『挑戦』が必要であるというメッセージを込めました。

優秀演題6題、一般演題539題(一般口演311題、オンデマンド発表228題)に加えて、『原点と挑戦』のテーマに沿ったトピックスを中心に8つのシンポジウム、5つのパネルディスカッション、10の教育研修講演を企画致しました。岩崎倫政先生に理事長講演、上羽康夫先生、大西公平先生(慶應義塾大学ハプティクス研究センター センター長)、高橋由伸氏(読売ジャイアンツ球団特別顧問)に特別講演をお願いし、いずれも今後の指針となる深みのあるお話を頂戴しました。海外招待演者としてDaniel Herren先生、Christopher Mathoulin先生、Steve Moran先生、Jeffery Yao先生、

Eugene Ek先生、Joo Yup Lee先生、さらに6名のトラベリングフェローにご参加頂き、久しぶりのface to faceでの国際交流になりました。査読点数上位の演題6題(臨床、基礎各3題)による優秀演題セッション、「Hand surgery knowledge update 2023」(journal club)、4つのハンズオンセミナーに加え、スポンサードセミナーやワークショップも実施致しました。多くの皆様にご参加頂き、熱い討論が繰り上げられた結果、時間を多少超過してしまったセッションも多くございました。主催者としては嬉しい悲鳴を上げました。

かつて岩崎理事長がおっしゃったように、学術集会の成否は、多くの質の高い研究演題が発表されるかどうかにかかっております。本学術集会で発表された演題が一題でも多く英語論文として世界に発信されることを、楽しみにしております。

本学術集会開催は慶應義塾大学としては、1959年第3回学術集会(岩原寅猪会長)、1977年第20回学術集会(池田亀夫会長)、1990年第33回学術集会(矢部裕会長)以来、4回目、同門としては、2009年第52回学術集会(堀内行雄会長)、2015年第58回学術集会(根本孝一会長)以来、6回目でありました。学術集会会長に指名して頂いてからの約3年間、慶應義塾大学上肢班ならびに整形外科教室同門、スポーツ医学総合センターの力を結集して準備を進めて参りました。この間、本学会会員の皆様に多大なご協力、ご支援をいただき、また、非常に多くの方々から様々な形でご支援を頂戴致しました。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

来年は面川庄平会長のもとに第67回日本手外科学会学術集会が2024年4月25、26日に奈良で開催されます。素晴らしい学術集会になりますことを祈念いたします。



閉会式にて

新名誉会員のご挨拶

日本手外科学会新名誉会員のご挨拶

昭和大学医学部整形外科学教室 稲垣克記



この度、一般社団法人日本手外科学会評議員の任を終え、名誉会員の称号を授与する栄誉を受けました。昭和大学医学部整形外科学講座主任および大学附属病院診療科長の14年間と本法人理事の4年間とその基盤学会である日整会理事の4年間、また第51回日本手外科学会学術総会会長として学会運営をさせて頂いたことに心から感謝申し上げます。本学会の関連学会である日本肘関節学会の理事長としても4年間新法人の立ち上げに尽力させて頂きました。これらの職を無事に全うできたのも本法人岩崎理事長はじめ歴代の理事長先生、法人役員の諸兄、全国大学と病院の仲間、そして優れた会員の皆様に支えられてのことです。関係諸氏の皆様には心から感謝の意を表したいと思えます。本当にありがとうございました。

私は国立東京教育大学附属（現筑波大附属）高等学校を卒業したのちに昭和大学医学部に入学し1984年（昭和59年）卒業後大学院に進み当時の藤巻悦夫教授（第42回日本手外科学会会長）の命で東京大学整形外科にて長野 昭准教授（浜松医科大学名誉教授）のもと末梢神経外科学の研修を2年間行わせていただきました。当時は落合直之先生、立花新太郎先生、飛松好子先生、三上容司先生はじめ本学会の錚々たる面々があり、多くの先生から診断学の基本と筋電図や誘発筋電図のご指導を頂きました。その後、都立広尾病院整形外科に移り、原 徹也部長のもと整形外科一般と腕神経叢麻痺、脊髄損傷などの神経外科学の臨床研修、特に腕神経叢麻痺に対する肋間神経移行術、Steindler手術、肩関節固定、分婭麻痺に対するMultiple Muscle Transfer、陳旧性腕神経叢損傷に対する遊離筋肉移植を併用した肋間神経移行術等を約3年間に渡り、原 徹也先生にマイクロサージャリーは東京高輪病院の赤坂先生にご指導頂きました。

1997年4月に藤巻教授と原先生、Michael Wood教授のご推薦を得て、当時Morrey先生が医学部長をされていた米国Mayo Clinicに2年間留学をする機会を得ました。この間は手・肘のBiomechanics中心のTranslational ResearchをAn教授に、人工肘関節の基礎と臨床をMorrey教授に、肘関節不安定症の新しい概念をO'Driscoll教授にご教授いただき研究を進むことができました。その後は現在まで25年間にわたり私を含め教室から9名の教室員と3名の教室員外の手外科医計12名にMayo Clinicへ留学して頂きました。Mayo Elbow ClubのActive Memberとして私は現在も活動を続けさせていただいております。

私自身は歴史と伝統あるASSH (American Society for Surgery of the Hand) の座長やライフワークである人工肘関節のLive Surgery講演を米国にてさせていただく幸運に恵まれました。これらは皆関係各位の温かい励ましとご支援のおかげと思ひ感謝の気持ちでいっぱいです。これからも医師として患者さんに優しく寄りそい長期にわたって励まし合えるよきAcademic Surgeonを目指して生きてゆこうと思います。沢山の素晴らしい恩師と日手会の優れた仲間を支えられて今まで走ってきました。今後とも皆様からのご指導とご鞭撻を切にお願い申し上げます、名誉会員の称号授与の御礼とご挨拶にかえさせて頂きます。

新特別会員のご挨拶

日本手外科学会特別会員に推挙されて

西奈良中央病院整形外科 小 野 浩 史



この度は伝統ある日本手外科学会の特別会員にご推挙いただき誠にありがとうございました。身に余る光栄なことであり、会員の皆様には厚く御礼申し上げます。私は1983年に奈良県立医科大学整形外科学教室に入局後すぐに玉井進先生の率いる手の外科・マイクロサイザーリーグループに所属し、1985年の第28回日本手の外科学会から学術集會に参加してきました。日本手外科学会は1957年7月に第1回学術集會が開かれており、私の生まれる10日ほど前のことで大変親しみを感じました。いくつかの関連病院勤務を経て1990年に奈良県立医科大学整形外科教室に帰学し、教室を主宰されていた玉井進教授のご指導の下、本格的に手の外科とマイクロサイザーリーの研鑽を始めました。マイクロサイザーリーを用いた切断肢指再接着や複合組織移植を行う傍ら、手関節とくに手根不安定症に興味をもち研究を開始しました。しかし、当初は大学で手の外科診察を行っていても一向に手根不安定症を見つけることができず、米国とくにMayo clinicにしかない疾患ではないかとさえ思いました。そんな折、玉井進教授や矢島弘嗣先生に勧められて手根不安定症の診断学の第一人者であるセントルイス・ワシントン大学のLouis Gilula教授のもとへ留学する機会を得ることができました。留学時にはGilula教授が患者の手関節痛の原因を突き止めようと努力する熱意とこだわりを肌で感じ感銘を受け、帰国後の私の手外科診療の礎となりました。手根不安定症に興味をもって約30年その診断・治療を探究してまいりましたが、まだまだわからないことばかりで興味は尽きず若い後輩手外科医たちの更なる研究を後押ししていきたいと思っております。

日本手外科学会では1998年第41回学術集會を玉井進教授が開催された折に奈良県立医科大学スタッフとして運営に携わる貴重な機会を得ることができました。2004年からは評議員・代議員を拝命し広報渉外委員会・学術研究プロジェクト委員会などを10年ほど勤めさせていただき、担当理事と委員の先生方には大変お世話になり多くのことを学ばせていただきました。

私の所属する奈良県立医科大学整形外科学教室は 来年手の外科講座教授の面川庄平先生が第67回日本手外科学会学術集會を開催する予定です。奈良の開催は第24回増原建二教授、第41回玉井進教授につき3回目です。手外科グループ一同の総力を上げて準備を進めてまいります。多数の皆様のご参加を心からお待ち申し上げます。

最後に日本手外科学会がなおいっそう発展し、会員の先生方が益々活躍されることを祈念して、特別会員推挙の御礼の言葉とさせていただきます。

新特別会員のご挨拶

日本手外科学会・特別会員に就任にあたりご挨拶

東北労災病院 整形外科 信 田 進 吾



この度、2003年4月19日の日本手外科学会・代議員会におきまして、日本手外科学会・新特別会員を拝命しました。身に余る光栄に存じます。

私は1983年に東北大学を卒業後、国立水戸病院・研修医ののち、1988年より東北大学病院整形外科に勤務、末梢神経障害の研究を行って参りました。1990年に日本手の外科学会に入会し、1991年5月の第34回日本手の外科学会で初めて演題を発表しました（腕神経叢麻痺の電気生理学的診断法）。1992年より東北労災病院に勤務となり、以後、末梢神経障害、特に手根管症候群、肘部管症候群、尺骨神経管症候群、前骨間神経麻痺、を中心に本学会には大変お世話になり、大勢の先生方のご指導のもとに勉強させていただきました。2002年より評議員（代議員）を拝命し、教育研修委員会、学会誌編集委員会、等を担当しました。2004年6月のハンガリー・ブダペストでの第9回国際手の外科学会に参加、演題を発表したことは今も忘れられない思い出です。2004年11月には大阪市で第5回アジア太平洋手の外科学会が開催され、演題を発表したことも忘れられません。2018年より理事を拝命し、施設認定委員会、用語委員会を担当させていただきました。どちらの委員会も、委員の方々の熱心なご活動に助けていただきました。この場をお借りしてお礼申し上げます。2023年3月をもちまして、私は東北労災病院・副院長を定年退職となりましたが、4月からは嘱託として勤務しております。今後も引き続き、末梢神経障害を中心に診療を続けて参りたいと存じますので、ご指導を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

2023 Congress of the Asia Pacific Federation of Societies for Surgery of the Hand (APFSSH) への参加記

市 原 理 司

日本手外科学会国際委員会 委員長

2023年5月31日～6月3日にシンガポールExpoで開催された13TH APFSSH, 9TH APFSHT & 8TH APWA CONGRESSに日本手外科学会理事長の岩崎倫政先生をはじめ、40名以上のJSSHメンバーが参加しました(写真1)。今回は日本から選出された17名のIFSSH Pioneer of Hand Surgeryの自伝が掲載された“Crafting A Legacy”というCommemorative bookが出版されたことを記念してセレモニーが行われました。セレモニーの中で17名のJSSHのパイオニアをはじめとするAPFSSHメンバーの功績が紹介されました。日本からは腕神経叢損傷の機能再建で世界的に有名な土井一輝先生がセレモニーに参加されました(写真2)。



写真1 学会ポスター前でのJSSHメンバー写真



写真2 土井一輝先生(左から4番目)、セレモニーでのAPFSSHから選出されたパイオニアとの記念撮影

Scientific sessionでは多くのJSSHメンバーが講演をされました。APWAでは安部幸雄先生が御自身の開発された橈骨遠位端骨折に対するPART法の講演を行い、中村俊康先生がTFCC損傷のセッションの座長と講演をされました。APFSSHでは岩崎倫政先生がキーンベック病の最新の知見を講演され、田島達也先生の名前を冠したTajima Lectureの座長を金谷文則先生がされました。またJSSH前理事長の平田仁先生が脳内のマッピングと手の機能に関する講演をされました(写真3)。



写真3 JSSHメンバーによるScientific sessionでの講演

学会初日の夜には、これまでの国際学会にはない試みとして、国際委員会主催でJSSHメンバーでの懇親会を企画しました。若手の先生や、レジェンドの先生に多数参加頂き、普段話す機会のない先生方同士での年代を超えた交流が実現しました。総勢31名の先生に参加頂く盛会となりました(写真4)。また、学会3日目の夜にはCongress DinnerがFlower gardenで開催され、こちらも多くのJSSHメンバーが参加し、アジア太平洋地域の手外科医達と親睦を深めました(写真5)。

2029年にAPFSSHをJSSHが日本で主催することが決まりました。多くのPioneer of Hand Surgeryを輩出してきたJSSHらしい国際学会になるように、数年かけてじっくりと準備を進めて行き、Instructional course lectureや歴史ある日本の文化を体験してもらえるように様々な企画を立案していきたいと思います。



写真4 JSSHメンバー懇親会後の集合写真



写真5 第66回日本手外科学会にTSSH traveling fellowとして参加したメンバーとのCongress Dinner会場での写真

手外科バトンリレー (第 11 回)

手外科医として 40 年

— 素晴らしい仲間との軌跡 —

田 中 寿 一

旧所属：兵庫医科大学整形外科

現：神戸大山病院 顧問

手外科・スポーツ傷害治療センター長

我が国の手の外科学会は、整形外科の中で最も古く分科会を設立 (1956：神戸) し、発展を遂げてきました。黎明期が、田島/津下が第一世代とすると、第二世代は、山内/玉井/矢部/生田/上羽/三浦/藤澤/室田/平澤/阿部等々の全国の大学整形外科主任教授を配した時代です。当時の手外科は高度なatraumatic手技、加えて指再接着の成功 (玉井) からマイクロサージャリー手技を駆使して、神が人に与えた最高の器官である手の機能再建を担う分野であり、整形外科の中でも憧れの領域の一つであったと思います。この時代を経て、我々の第三世代に繋がりました。この手外科医としての40年を振り返りたいと思います。(敬称略)

仲間の絆-HAND Club 50

この第三世代の仲間を束ねたのが、“**HAND Club 50**”です。弘前大の藤・聖マリ大の別府、そして私が、昭和50年卒の同学年であったことより、当時手外科を専攻している若手のアクティブメンバーを見ると卒年50 (±3) の中にほとんどの先生が入ることが判り、**同じ志のメンバーで垣根を越えて語ろう!**との呼びかけを行い、会が発足しました。

会といっても、特にテーマ等はなく、ただ集まって飲み/食いの会でした。日手会の時は時間が取れないので、日本整形学会総会の夜に、開催地近くの人が世話人となり**HAND Club 50**の会が開かれました。同じ境遇での他大学の人達との忌憚なき会話は楽しく、毎回2次会～3次会と夜遅くまで続けました。学会会場ではできない学閥を超えた人間的な付き合いができた楽しく/貴重な場となりました。この会は、1993年から15年間続きました。しかし、ほとんどのメンバーが日整会の要職に就任してしまい(?)、時間の設定ができなくなったというのが終焉の理由でした。この仲間から、手外科学会の中核業務を担う理事/歴代学術集会会長や各種委員会の長が選ばれ、我々の時代も第二世代に負けないアクティブ世代であったと自負しています。この仲間の絆は、今も続き人生の“宝”になっています。(写真1)



写真1 “HAND Club 50” (1993.4.9)

広報委員会での活動

さて、私は手外科学会内では広報委員会を(委員/委員長/理事)主に活動してきました。この広報委員会は生田先生が会長時に“世に手の外科を広める”広報活動が必要と設立され、初代理事の藤澤幸三先生の下、活動を開始いたしました。日手会ニュース、患者説明用のパンフレット作製、さらに手の外科グッズとして-ネクタイ、ネクタイピン、専門医バッジ(田島先生直筆の手像を入れた)等を作成しました。最も記憶に残る活動は、学術集会-荻野会長時に手外科学会発足50周年記念会を委員会主導で開催/運営したことです。

手外科医として

一方、自身の手外科医としての活動は、大学病院(33年間)は患者にとって、最終の砦との自負の下、診療・手術にと励んで参りました。特に、独自の医療材料(DTJ screw・靱帯再建用器材“TJ screw system”)の開発を行い、特にLife work ともいえる舟状骨骨折/偽関節治療で、このDTJ screwにて治療した選手が、金メダルを獲得してくれ、レベルの高い独自性を持った診療もなしえたと思っています。そして、これらの成果を、国内の学会、さらに海外での学会(IFSSH/APFSSH/ASSH/ドイツ語圏手外科学会)にも積極的に参加し、発表も行ってきました(写真2)。また、国際交流として、2つのTravelling Fellowに選ばれ、1993年には、GOTS-Fellowヨーロッパ(ドイツ・スイス・オーストリア・オランダ等)、1996年にはAOA-JOA Fellowで全米16施設を講演・訪問し見聞を広めることができました。これらの経験は、自身を手外科医として一段高く/また幅広い領域へ羽ばたかせてくれたと思います。これらのお陰か、2013年には、第56回日本手外科学会学術集会を開催させていただきました。

さて、このように、自身の手外科医としての人生を振り返ると、素晴らしい仲間恵まれ、共に、世界に羽ばたけた幸せな世代を生きてきたと思います。



写真2 IFSSH-Vancouver1998

手外科の“匠”を志す若い先生方に

最後に、これから手外科を志し、さらに“匠”を目指す若い先生方に以下のことを伝えたいと思います。

まず、いい師の下で研修を行い、上手な手術を数多く見ることで、そしてそれを忠実に真似すること、これができれば、技術が習得されている立派な手外科医です。そして、その結果を国内/海外で発表し、その成果を世に問うことで、より高みのある領域へ上ることができます。次にはそれを基に、よりよい成績・手技を追及する新しいことへ挑戦をしてください。それには、従来の考えにとらわれない発想の転換が必要です。また、いつもアンテナを張り巡し、他の分野のアイデアを知ることも必要です。それがなしえたら“超”の付く手外科医の“匠”になるはずですよ。

自分で執刀するようになって40年、私が、本当に“匠”の域に達したかと問われれば、未だ“？”です。手外科という世界は、かように奥深き、興味のつきない素晴らしい世界である！と改めて思うこの頃です。

期待権侵害について

勝 見 泰 和

明治国際医療大学

医療での裁判外紛争解決 (ADR ; Alternative Dispute Resolution) では、「期待権侵害」という言葉をよく耳にする。医療契約は準委任契約であり、結果を保証した請負契約ではない。しかしながら、治療成績が悪い時には期待権侵害が問われることがある。不確実な医療において、過剰に期待をされても困るというのが医療側の実感である。今回は、法律上の患者の期待権について説明し、手外科医のリスクマネジメントの観点から期待権侵害について考えてみた。

フリー百科事典「ウィキペディア」によると、**期待権とは特定の状況下において特定の結果を期待することそのものを権利として定義した法律用語**と記されている。この権利は制定法により定義されたものでなく、権利の認められる範囲や、個々の権利がどの程度まで法的保護を受け入れるかについては、明確ではない。医療訴訟では、期待権侵害が認められた事例の報告が複数ある。過剰に高い期待から期待権侵害を認められることについては、医療側からの強い反発がある。2011年2月25日最高裁第二小法廷判決では、「患者が適切な医療行為を受けることができなかった場合に、医師が患者に対して、適切な医療行為を受ける期待権の侵害のみを理由とする不法行為を負うことがあるか否かは、**当該医療行為が著しく不適切なものについて検討し得るにとどまるべきものである**」と判断している。期待権について、ある程度の歯止めをかけているようであり、著しく不適切な医療行為に対して検討するとしている。著しく不適切な医療行為とは、当然ながら、一般的な医療水準から判断されるのであろう。

手は進化の過程で、精微な解剖学的構造によって、特殊な手の機能を持つようになった。その構造体の破綻を修復する手外科の手術や術後リハビリテーションは非常に難しい。愛護的手技を用いても、手術侵襲はゼロではない。不適切な医療行為でなくとも、拘縮などの機能障害が残存することもある。医療ADRでは、一般的な医療水準を考えながら、各委員の経験上の知見により判断しており、できるだけ中立的な立場で介入している。医療側の弁護士さんは以下のことを強調される。①診療録は詳しく書いてください。②治療内容や成績について詳細に説明して下さい。③患者さんが怖がらない程度に合併症や危険性についても詳しく説明して下さい。以上、法学と医学の間には齟齬が多々あると感じますが、「**患者さんを自分の家族と考え、よい結果が得られるように、日々研鑽する**」ことがリスクマネジメントといつも考えています。

引用文献

1. 日本法における議論、期待権、フリー百科事典「ウィキペディア」
2. 最高裁判所平成23年2月25日第二小法廷判決 判例タイムズ1344号

Joy の声（第 8 回）

中 川 夏 子

兵庫県立加古川医療センター

リウマチ手外科について

私は現在、兵庫県立加古川医療センターのリウマチ膠原病センター長として勤務しており、毎日充実した日々を過ごしています。元々大学院で関節リウマチに関連した研究テーマで学位を取得したのですが、その後勤務することとなった病院がリウマチ専門病院であったことから、一気に関節リウマチ治療に魅了されました。薬物治療もやりがいがあったのですが、中でもリウマチ手外科の魅力にすっかりとりことなった私は、リウマチ外科・手外科の著名な先生方にお会いできる機会に恵まれて、色々ご指導をいただきながら、夢中になってリウマチ治療に邁進してきました。

リウマチ手外科に携わることの多い私ですが、機能面のみならず外観上の問題も抱えている患者さん達はめずらしくありません。薬物治療が進歩してもまだ手指変形の問題は残っていて、できる限りその悩みに寄り添って、手術治療を考えていきたいと思っています。このような「見た目」に関する相談にのる時、女性医師でよかったと思うことがあります。また、リウマチ患者さん達はもちろん女性が多いですから、外来診察で、何となくある種微妙な問題について話すこともあるので、女性医師である私がお役にたてるのではないかと思ったりしています。



2019SICOT (Muscat, Oman)にて 中央が筆者、当院整形外科先生方と

最近、男女共同参画の重要性が注目されるようになっていきます。女性医師数も増加の一途であり、将来が楽しみです。手外科領域は女性医師に向いている面も多いと思います。キャリア形成の際、専門医取得などで、難しい局面にぶつかってしまうこともあるかもしれませんが、あきらめずに周囲に相談していただき(日手会にも相談窓口があります)、より良い方向性を考えていってもらえればうれしいです。私自身、リウマチ手外科治療に携わることはとても幸せであり、やりがいがあると思っているので、この魅力をもっと発信していきたいと考えています。そして女性のみならず、可能な限り多くの先生方と、この世界で一緒にさせていただければと思っています。私は多くの先生方に今までご指導いただき、お世話になった皆様にくら感謝してもしきれないほどです。このご恩をお返しする意味でも、今後は、女性リウマチ外科医・手外科医の立場で、もっと人の輪を広げていくことができれば、と願っています。手外科治療・リウマチ治療に携わる先生が、もっと増えていくことが私の願いです。どうかこれからもよろしくお願い申し上げます。

Orthopedics e-Poster

PowerPoint プレゼンテーション

1/1

Short-term outcome of MP joint arthroplasty in rheumatoid arthritis

Nakagawa N, Uefuji A, Takahara S, Kishimoto K, Aoki K, Takayama H, Harada T.

Abstract Number: 53329

Hyogo Prefectural Kakogawa Medical Center

Introduction

- In the treatment of rheumatoid arthritis (RA), the control of disease activity has been significantly improved due to recent advance of RA treatment.
- It has been reported that biologic agents inhibit progression of the joint destruction.
- The purpose of this study is To evaluate the effectiveness of hand surgery and rehabilitation in RA patients

Material & Methods

43 MP joints 13 patients (underwent MP joint arthroplasty from April 2016 to March 2018)
gender: 1 male, 12 female
age at operation (mean): 54.80 years (71)
Follow-up period (mean): 5-26 months (15.4)

Results:

At the time of follow-up, pain was relieved, swelling was diminished, and deformity was collected. Although MP joint flexion angle showed no significant change after surgery, extension angle was improved.

Results

Results: ROM (thumb MP)

	pre ope	post ope
Flexion	70.8	55.3
Extension	-52.5	-16.6 *

Results: power grip

	pre ope	post ope
	6.5	6.3

Results: ROM (2-5 MP)

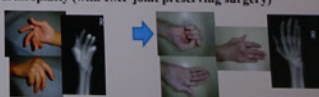
	pre ope	post ope
Flexion	86.7	65.5
Extension	-48.0	-15.1 *

Results: DASH

	pre ope	post ope
	54.4	41.9

Case: 71 year-old-woman RA

In spite of RA good control with GLM, her right hand deformity had progressed. She underwent 2345MP implant arthroplasty (with 1MP joint preserving surgery)



The postoperative clinical courses of these patients

web and Windows

2019SICOT (Muscat, Oman) でリウマチ指変形に対する手術について発表

AI による X 線画像からの 3 次元画像作成

塩 出 亮 哉

大阪大学 整形外科

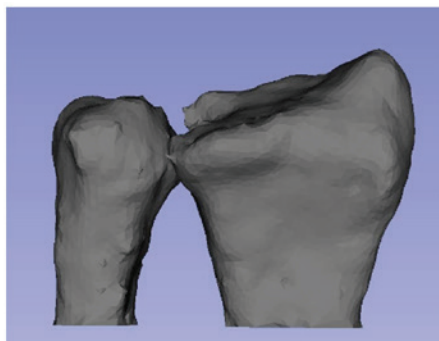
我々の幼少期、映画やゲームは2次元の画面で楽しむことが普通であった。技術の進歩と共に3次元で楽しむものになり、今ではVirtual Reality (VR) やAugmented Reality (AR) でも楽しむことができるようになってきている。2次元の画像と比較して、3次元の画像は視覚的に得られる情報量が多いことは明白で、時代の進歩と共に3次元画像は受け入れられてきた。一方で、人工知能 (AI ; Artificial Intelligence) 技術は、顔認証システムや自動運転技術、最近では家電にも広く搭載され、今や日常生活において珍しいものではなくなっている。医療においても主に診断補助の分野で広く研究が進み、整形外科領域において骨折や骨粗鬆症の診断、骨年齢の予測などに利用されている。

医療の現場において、Computed Tomography (CT) の普及により、3次元画像を比較的容易に取得可能となった。骨関節疾患においても3次元画像から得る情報は多く、重宝されている。しかし、骨関節疾患における一般的な画像検査は2次元画像である単純X線画像である。これは、CT撮影に伴う放射線被曝や医療コストの増加といった問題があるためである。画像処理技術の分野においてはAIを使って、家具や飛行機の写真から3次元形状を推定する研究が報告されている。我々は医療への適応の可能性を見出し、AI技術を応用することで、単純X線画像のみから被写体である骨関節の3次元構造を推定することが出来ないかと考えた。そこで、我々は、奈良先端科学技術大学院大学 情報科学研究科 生体用画像研究室の佐藤嘉伸教授、大竹義人准教授らと共同研究として、**AIの技術を用いて2次元画像である単純X線画像から3次元骨形状を推定構築する技術開発**を行うこととした。

単純X線画像 (正面像)



推定される3次元骨形状



手関節単純X線画像正面像1枚のみから前腕遠位部の3次元骨形状を推定した結果

本技術では、2次元画像として単純X線画像を、3次元画像としてCT画像のデータセットを用意しAIを学習することで実現した。AI研究における医用画像の問題点であるデータ数が限られるという問題点は画像処理技術で解決し、**手関節単純X線画像正面像 1 枚のみから前腕遠位部の3次元骨形状を推定構築することに成功**した。今後の展開として、まずは骨折や骨折後変形治癒などの疾患例、全身の骨への適応拡大を目指している。また術中透視画像への適応拡大を行い術中支援ツールの開発も取り組む予定である。

現在は正常の前腕遠位部のみの適応に限られるが、本技術の適応拡大により、単純X線画像を撮影すると自動的に3次元形状が画面に描出されるということになれば、CT検査の必要性が減少し、医療被曝・医療コストの低減に繋がるだけでなく、患者理解度の向上につながり、日常診療の質が飛躍的に向上する可能性がある。

物故会員への追悼文

故 生田義和先生を偲んで

砂 川 融

広島大学大学院医系科学研究科 上肢機能解析制御科学 教授
一般社団法人 津下・生田メモリアル広島ハンドクラブ理事長

2023年1月27日に恩師生田義和先生がお亡くなりになりました。先生のご逝去を悼み、謹んでお悔やみ申し上げます。

先生は私が医学部6年生の1985年に広島大学整形外科教授に御就任となり、所属していた硬式テニス部の部長となられてからのお付き合いでした。部の集まりでは非常にユーモアのあるお話をされ、そのお話が私のツボに嵌り整形外科に入局しました。それ以降は先生の後を追いかけるように手の外科、マイクロサージャリー班で研鑽を積むこととなりました。

先生は1965年整形外科入局直後に大学院に進学され、津下健哉教授の下で当時師事する人、文献、教科書、道具等全てがないマイクロサージャリーの研究を開始されました。先生は卓越したアイデアと行動力で道なき道を開拓され、10-0針付ナイロン糸の作成や生田式微小血管止血固定鉗子をはじめとするマイクロサージャリー手術器械一式の開発を行われ、研究開始から12年後の1977年にこの分野では初めての教科書である「微小外科」をまだ当時助手という身分であったにも関わらず、単著で発刊されたことは何物にも変え難い御業績です。途中1976年には重度Volkman拘縮例に対して遊離大胸筋移植術を成功され、当時は「何をやっても世界最初の例で楽しかった」と言っておられました。これも先生の卓越したアイデアと行動力の産物と言えるでしょう。手術では常に各々の患者に対してより良い方法を模索するために、文献を参考にされるというよりは自分の頭の中にあるアイデア、イメージを大切にされていたように思います。術前カンファレンスではしばしばそのような方法があったかと感心させられました。アイデアマンの先生は既存のものより常に新しいものを求められ、私が大学院生の頃の1990年代には、顕微鏡を用いないビデオカメラでの対象物の拡大、立体視の開発や微小血管吻合へのロボットの導入を模索されていました。また、1994年に広島で主催された第37回日本手の外科学会時には、初めての「手の外科展」を広島そごうで開催され、手の外科の一般への啓蒙に努められました。

先生が特に力を注いでおられたのがマイクロサージャリー手技普及のための教育です。広島マイクロサージャリー講習会を15回開催され、700名以上の講習生に直接指導にあたられ、海外ではヨーロッパやアメリカ、東南アジア、中東に招待手術や講習会のため訪問され、現地でのマイクロサージャリーの普及に努められました。特に思い出深いのはフランスではその後マイクロサージャリー分野を牽引することになるDr. MerleやDr. Foucherを助手に従えて同国での初めての遊離組織移植を行なったことであると言われていました。先生は私達には細かく指導されることはなく、見せて教える指導者でした。私は先生の腱移行術の美しく理にかなった手術が好きで、大学病院での最終手術にも選ばせていただきました。言葉で教えていただいていたのは手術での心構えなどで、その概要は「手術の道を究めるために一五輪書から学ぶ」として出版されました。

先生がお亡くなりになられたのは私が会長を担当させていただいた第40回中部日本手外科研究会の前日で、ご参加いただけなかったのが何よりの心残りではありますが、天国から見守っていただけていたのではと思っています。先生の教えを継承し、手外科、マイクロサージャリー分野の益々の発展に寄与することを誓い、追悼のご挨拶とさせていただきます、合掌。

物故会員への追悼文

橋爪長三先生を偲んで

医療法人社団曙会 流山中央病院 加 藤 博 之

日本手外科学会特別会員の橋爪長三（はしづめ・ちょうぞう）先生が、2022年11月に長野県の新生病院で亡くなられた（写真1）。93歳であった。亡くなられる数年前までの60年間、手足に障害がある患者さんに、分け隔ての無い献身的な手術治療を続けて来られた。

橋爪先生は長野県伊那市出身で、1955年に信州大医学部を卒業され、開講されたばかりの信州大学整形外科に入局し整形外科の研鑽をされた。1963年に瀬戸内海の国立ハンセン病療養所長島愛生園に赴任され、同じ大島青松園も含め、12年間をハンセン病による手足変形の再建手術に尽力された。自ら進んでハンセン病医療に転身された理由として、橋爪先生は敬虔なクリスチャンであり、医師の道を選んだのは障害のある人の助けになりたいという強い動機があったと聞いている。さらに日手会ニュース第49号の手外科バトンリレー第2回、矢部裕先生の記事には、1962年第7回日本手外科学会学術総会（岡山大学主催）で、当時岡山大学助教授であった津下健哉先生によるハンセン病麻痺手の機能再建手術の供覧が、長島愛生園で行われたと記されている。橋爪先生は、津下先生の手術供覧に参加され生涯を捧げる道を見つけられたに違いない。前述の矢部裕先生の記事によると、矢部裕先生も同時期に長島愛生園に赴任されておられ、橋爪先生と2人で毎週金曜日に瀬戸内海の小島から岡山大学まで津下健哉先生の手術を見学に行かれたようである。その頃のハンセン病患者は、本人はもちろん親族もいわれの無い迫害を受け、瀬戸内海の療養所に自ら進んで入所したと聞いている。1980年に、ハンセン病に対するご貢献から「らい学会賞」を受賞されている。

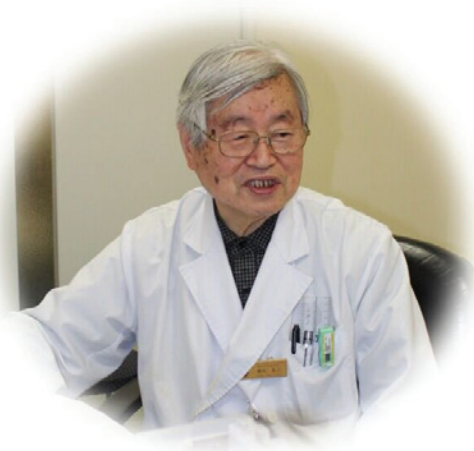


写真1 新生病院ホームページより

1974年から長野県身体障害者リハビリテーションセンターで所長を務められ、頸髄損傷後の麻痺手に対する機能再建手術を新たな標的として挑戦を始められた。その成果は、「腱移行術による麻痺手の再建とその応用：頸損麻痺レベル別99手におよぶ機能再建術」(三和書籍、8300円、2016年)の中に、多数のカラー写真とともに紹介されている。序文で橋爪先生は、「大学では経験のできない治療が出来ました事は感謝ではありますが、他方未熟のため不十分な治療に終わり、患者さんに対し申し訳ないというお詫びの気持ちも常に残っております。書きました症例の中にも不十分な治療に終わった症例も載せてありますので、これから治療、研究をされます若い医師の方々には是非参考にしていただき、良い治療を目指していただきたい」と記している。同門の内山茂晴先生の話では、信州大学整形外科の手外科を志す医師は橋爪先生に直接指導を受けてきており、腱移行術の真髄を見た彼らは、現在も麻痺手の再建手術の継承を担っているとのことである。

1994年から長野県の新生病院の名誉院長として約20年間勤務されている。同院では、上肢一般手術に加えて、Charcot-Marie-Tooth病や内反足に対する変形矯正術など、80歳代半ばまで週に5、6件の手術を執刀されていた。さらに同期間は毎年、バングラデシュでの医療活動に参加され、小児の麻痺性疾患や熱傷後の癱痕性拘縮、内反足など総計約300件の手術を執刀されている。有志として同行された保坂正人先生によると、手術室は、滅菌が不十分で感染も多く、駆血帯(タイヤチューブで代用)もX線装置も無く、骨・関節の手術に必要な器具も材料も乏しかったとのことである。ある年は、現地で肺炎に罹患したにもかかわらず、予定手術の執刀を遂行することで気力を取り戻し(写真2)、無事に日本に帰国されたとのことである。

私が橋爪先生に初めてお会いしたのは、信州大学に赴任した2003年である。私の赴任中に、大学では治療が難しい女子中学生の下腿フォルクマン拘縮の治療をお願いし、神経剥離術と足関節拘縮解離術を執刀して頂いたことがあった。既に80歳近くであったと思うが、5時間近くの手術を立ったまま執刀され、要所は一眼レフカメラを取り出し、ご自分で記録された。そのような橋爪先生の慈愛に富む医療、尽きることのない探求心と体力・気力に感銘を受け、医学生への整形外科講義の1コマを橋爪先生にお願いすることにした。橋爪先生の講義は、「私は酒もたばこもやらない、日曜日は教会に行く、患者の全人格を尊重して治療する」との心構えから始まり、ハンセン病やバングラデシュでの医療など型破りなものであった。私も医学生に交じって、胸を熱くして聴講した。医学生によるベストレクチャー賞投票では橋爪先生は常に上位で、数回は最優秀レクチャー賞を受賞された。お亡くなりになった後に娘さんから、ベストレクチャー賞の小さなクリスタルのトロフィーを父がとっても気に入っておられたとお聞きした。橋爪先生の穏やかな顔が目に浮かぶようである。

安らかに眠りください。



写真2 2010年11月バングラデシュ手術室にて。81歳の橋爪先生は、肺炎で体調不良のなか、ポリオ後遺症の内反尖足変形の矯正術(5時間超)を執刀された。

日本手外科学会関連のお知らせ

◆第 67 回日本手外科学会学術集会◆

会 期：2024 年 4 月 25 日（木）～26 日（金）
会 場：奈良県コンベンションセンター／JWマリオット・ホテル奈良
会 長：面川 庄平（奈良県立医科大学 手の外科学講座）
詳 細：<https://naraseikei.com/67jssh/>

.....

◆ 2023 年度教育研修会◆

会 期：2024 年 1 月 20 日（土）～3 月 20 日（水）※予定
会 場：WEB開催（オンデマンド配信）
詳 細：準備中
主 管：日本手外科学会 教育研修オンラインマガジン運用委員会

.....

◆第 68 回日本手外科学会学術集会◆

会 期：2025 年 4 月 10 日（木）～11 日（金）
会 場：パシフィコ横浜 ノース
会 長：三上 容司（横浜労災病院 整形外科）
詳 細：準備中

関連学会・研修会のお知らせ

◆第 15 回日本手関節外科ワークショップ◆

会 期：2023年9月30日(土)
会 場：朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンター
会 長：森谷 浩治(一般財団法人 新潟手の外科研究所 所長)
詳 細：<https://shinsen-mc.co.jp/jsws15/>

.....

◆第 32 回日本形成外科学会基礎学術集会◆

会 期：2023年10月19日(木)～20日(金)
会 場：ステーションコンファレンス東京
会 長：三鍋 俊春(埼玉医科大学総合医療センター形成外科・美容外科 教授)
詳 細：<http://jsprs-kiso2023.umin.jp/>

.....

◆第 38 回日本整形外科学会基礎学術集会◆

会 期：2023年10月19日(木)～20日(金)
会 場：つくば国際会議場
会 長：山崎 正志(筑波大学 医学医療系 整形外科)
詳 細：<https://site2.convention.co.jp/joakiso2023/>

.....

◆第 34 回日本小児整形外科学会学術集会◆

会 期：2023年11月23日(木・祝)～24日(金)
会 場：神戸国際会議場(神戸ポートアイランド)
会 長：薩摩 眞一(兵庫県立こども病院 副院長)
詳 細：<http://jpoa2023.umin.jp/index.html>

.....

◆第 50 回日本マイクロサージャリー学会学術集会◆

会 期：2023年12月7日(木)～8日(金)
会 場：名古屋国際会議場
会 長：亀井 譲(名古屋大学 形成外科 教授)
詳 細：<https://www.congre.co.jp/50jsrm/>

◆第 67 回日本形成外科学会総会・学術集会◆

会 期：2024 年 4 月 10 日（水）～12 日（金）
会 場：神戸コンベンションセンター
会 長：寺師 浩人（神戸大学 形成外科 教授）
詳 細：https://jsprs.or.jp/member/meeting_info/2024/

◆第 36 回日本ハンドセラピィ学会学術集会◆

会 期：2024 年 4 月 27 日（土）～28 日（日）
会 場：奈良県コンベンションセンター
会 長：蓬萊谷 耕士（関西医科大学 リハビリテーション学部 作業療法学科 助教）
詳 細：<https://plaza.umin.ac.jp/jhts36hand/index.html/>

◆第 97 回日本整形外科学会学術総会◆

会 期：2024 年 5 月 23 日（木）～26 日（日）
会 場：福岡国際会議場・マリンメッセ福岡A館・B館
会 長：松本 守雄（慶應義塾大学医学部 整形外科学教室 教授）
詳 細：<https://www.joa2024.jp/>

◆第 37 回日本臨床整形外科学会学術集会◆

会 期：2024 年 7 月 14 日（日）～15 日（月・祝）
会 場：熊本城ホール
会 長：東 一成（熊本県臨床整形外科医会 会長）
詳 細：<https://www.c-linkage.co.jp/jcoa37/>

◆第 35 回日本末梢神経学会学術集会◆

会 期：2024 年 9 月 6 日（金）～7 日（土）
会 場：鹿児島県医師会館
会 長：高嶋 博（鹿児島大学脳神経内科教授）
詳 細：HP準備中

編 集 後 記

今年の夏は猛暑日の日数記録更新など例年になく暑い日が続き、熱中症で倒れる患者さんは後をたちませんでした。暑さは手外科治療の敵でもあります。ギプスやスプリント固定を受けている患者さんは大変だったろうと推察いたします。残暑がつづく中、日手会ニュース58号をお届けいたします。今回は慶應義塾大学の佐藤和毅会長より第66回日本手外科学会学術集会についてご寄稿を賜りました。また本ニュースを発刊するにあたり依頼を快く引き受けていただきました多くの先生方に心より感謝いたします。

本ニュースの中で個人的に心にささったのは加藤博之先生からご寄稿いただいた故橋爪長三先生の追悼文でした。2016年に橋爪先生の著書が刊行された時、私は真っ先に購入し熟読しました。教科書に乗っていないようなエキスパートの私見が随所に記載されており、最初に読んだときに感銘を覚えたことを思い出しました。他の記事においては手外科医として知っておくべき事や我々が進むべき道を示して下さっている内容など、読み応えのある記事が掲載できましたことを深く御礼申し上げます。これからも日手会ニュースがさらに充実した内容になるよう努力してまいりたいと思います。今後ともよろしくお願い申し上げます。

(文責:岩手医科大学整形外科 佐藤光太郎)

広報渉外委員会

(担当理事:古川洋志, 委員長:佐藤光太郎, アドバイザー:岸 陽子
委員:金谷耕平, 堂後隆彦, 中川夏子, 原 友紀, 宮崎 洋一)